

性別に縛られず “私らしく”
地域のために “伸び伸び” と働く



06

福井県
大野市長

石山 志保

ISHIYAMA Shihō

1974年6月29日 愛知県安城市生まれ
1997年 東京大学工学部卒業
1997年4月 環境庁入庁
2005年3月 環境省退職
2005年4月 大野市役所入庁

2018年2月 大野市役所退職
2018年7月7日 大野市長（第17代）に就任
2022年7月7日 大野市長（第18代）に就任

Turning Point 首長を目指したきっかけ



私がまだ学生だったころ、自然豊かな地域に足を運び、地域の人々と触れ合う機会があり、その経験が自然環境行政を志すきっかけとなりました。卒業後は、国家公務員になって、人と自然に関わる地域づくりに携わることができました。

結婚を機に夫の故郷である大野市のことを知った時、山と自然がいっぱいと聞き喜んで移住を即決しました。実際に訪れた大野市には、山の緑がきらきらと輝き、ほっとさせてくれる盆地があり、人々が丁寧に生活するまちがあり、すぐに気に入りました。

移住後は、試験を受けて大野市職員になり、一職員として地域づくりに取り組みました。人口減少が進む社会にあって、世代、分野、地域を横断して大野市が抱える課題が新たに増えてきました。市民の皆様が大好きな大野を、もっとたくさんの人々に好きになってもらいたい、時代の変化に対応して、大野市を担う人々に引き継ぎたいと思いました。

大野市役所では主に企画部門、財政部門に携わりながら市勢の発展を身近に感じて過ごしておりました。そんな折、中部縦貫自動車道の延伸を牽引されてきた前大野市長が勇退を発表されました。中部縦貫自動車道が延伸する流れを止めるわけにはいかない、延伸によるチャンスを活かしていかなければいけない、これからの大野市の発展を考える時、私のような働く世代が頑張っていかなければいけないという思いから、市役所を退職し、政治家の道を歩み始めました。



Episode

女性首長として苦勞された事、乗り越えたエピソード

初めての選挙の際、私の政策をお伝えするために市民との対話を重ねていく中で、「市長職は激務であり女性には務まらない」「女性なのにどうして出馬するのか」「家庭はどうか」という声をいただくことができました。首長には屈強な男性が就くのが当たり前で、家事や育児に忙しく体の小さい女性が就くことに、不安を感じられた部分があったのだと思います。市長に就任してからこれまで、自身の健康管理に気を付け、家族や地域、周囲の方々に支えていただきながら、職務を全うできるよう努力をしています。二期目の選挙の際には同様の不安に思う声をいただかなかったことを有難く思います。

市長就任時には、北陸3県で初めての女性首長が誕生したということで、各方面から取材を受ける機会を多くいただきました。取材テーマをお伺いしてみると、女性としてのコメントを期待されていたように感じましたが、私は市民と約束したまちづくりをしっかりと進めていきたいということや大野市の特徴や魅力をお話しさせていただいてきました。

これまで、これからも、男性だから、女性だからではなく、私らしく市政運営に携わっていくことを心がけていきます。

高速交通網が延伸（中部縦貫自動車道大野IC・九頭竜IC間が令和5年開通）を契機に地域経済の活性化に注力。令和3年に道の駅越前おおの荒島の郷を開駅し、年間平均約65万人が利用。令和5年には、南六呂師エリアにおいて、アーバンナイトスカイブレイス部門でアジア初の認定となる星空保護区認定を取得しました。ライフステージに応じ切れ目なく子育てを応援する「大野ですくすく子育て応援パッケージ」を令和2年度から推進中、令和7年に屋内型こどもの遊び場「おおの天空パークOSORA」をオープン。書かない窓口の導入や市公式LINEで市政情報を市民へ届けるなど、行政のデジタル化を推進。市役所の女性管理職比率は2割超を達成。

Message

次世代の女性リーダーへ向けてメッセージ

私は私らしい、市政運営を心がけているものの、それが何であるか悩むこともあります。しなやかで力強く、きめ細かで優しいリーダーシップを目指して、奮闘する毎日を送っています。

日本全体で人口が減少し、担い手が不足して、女性活躍が言われるようになりました。インターネットが普及して、今の世代は若い頃から世界の情報とつながるようになりました。地方部においてこそ、社会変化は顕著に表れ、対応の必要に迫られています。ジェンダーギャップが緩和され、国際化や多様化が一層進んでいく社会の中で、次世代のリーダーの方々のご活躍されることと思います。

どうぞ自分らしく、伸び伸び、とご活躍されますように！



←自治体ホームページはこちら